九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[017]九州人類学会報表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2236708

出版情報：九州人類学会報. 17, 1989-10-23. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

序　　文

九州人類学会会長　丸　山　孝　一

国際化ということが言われるようになって久しいが、文化には、これを支える社会的単位があり、その一つが国家という枠組みであると考えれば、その枠組み相互間の関連性が強化される過程をおそらく国際化と呼ぶのであろう。ところが、国家という枠組みには必ずしも囚われず、民族とか部族というカテゴリーで文化や人間の行動を考えることの多い文化人類学者や民族学者にとって、国際化に関する議論は、国際経済論者や外交論者のそれとは噛み合わないことが多い。

この点に関して興味深い最近の事例は、ソ連や中国で顕著な民族問題である。アフリカやアメリカでは、つねに社会問題となっていたが、これらの国々で共通する点は、民族問題が、実は国家の枠組みや原理を越えた問題であるのに、常に国内問題として処理されてきたということである。特に、最近のバルト３国問題は、世界各地で数多く見られる民族と国家の緊張関係を、最も明瞭に示しているように思われる。

他方、視点を変えて、国家の内部における中央と地方との対比の中で文化の問題を考えてみることもできる。特に、わが国の場合、「地方の時代」と言われ始めて、これまたかなりの歳月がたつと思われるが、政治権力や経済力の一極集中の状態はいっこうに改められそうにない。そこには、中央に権力が集中し、地方は弱小・マイナス、という図式がいつの間にか出来上がっているかのようである。

人間の集団的営みを、文化という概念を使って考えようという地方の研究集団、それが九州人類学研究会であろうと思う。本誌を一瞥して頂ければ明らかなように、本会会員による研究対象は近年とみに幅広くなってきた。本会会員は、東アフリカ、中南米、ヨーロッパ、東南アジア、西中国などと世界各地で調査活動に従事している。つまり、「国際化」時代の今日、「地方」に居住することは、研究対象地の選択において、ほとんどハンディーではなくなったと言えよう。願わくは、今後、地方における情報発信機能が一層充実することを。